

「始」の去聲音について

森 賀 一 惠

一 はじめに

『集韻』以降の韻書字書類には、しばしば「始」の去聲音を載せるものがあり、詩の注釋などの類にも、ある種の「始」に去聲の音をつけるものがある。この去聲音は、現在でも、四聲別義の研究書¹で、取り上げられる破読だが、『羣經音辨』卷六の「初也（式氏切，對終之稱），緩言有初曰始（市志切，禮蟬始鳴）」が起源だと思われる。この『羣經音辨』の記述が『經典釋文』（以下、『釋文』）解釋の誤りの一例であることについては、以前少し觸れたことがある²が、この文章では、「始」の去聲音が、『羣經音辨』の誤解から生じたものだと考える根拠をより詳しく挙げた上で、その誤りが後の時代に繼承されていった状況について知るところを述べる。

二 「蟬始，市志反」

『羣經音辨』卷六の「初也（式氏切，對終之稱），緩言有初曰始（市志切，禮蟬始鳴）」は、『礼記』月令「蟬始」につけられた「市志反」という反切に基づく。この反切は、「始」の音を示すものだと考えられることが多く³、阮元本十三經注疏に合刻された『釋文』でも、「始，市志反」とされている。しかし、これは本当に「始」の反切であろうか。

孫玉文2000は、『釋文』では、「始」に二箇所、音注があるとするが、そのうちの一つは、黃焯1980が、『古今韻會舉要』によって、月令「桃始華」にも「市志反」を補うべきだとするのに従った⁴もので、実際には、現行の『釋文』では、『礼記』月令「蟬始」に「市志反」が見えるのみである。『礼記』月令には、「蟬始鳴」のほか、これと同じ文法的機能を持つと考えられる「始」が二十餘りあるにもかかわらずである。月令に見える「始」は、以下のように、29ある。

1 孫玉文2000など。

2 森賀一惠2000。

3 例えば、歐陽德隆『押韻釋疑』卷三にも「始，詩止切，釋初也，記蟬始鳴，市志反，此非」とあり、反切が不適切であることは認めながら、「始」の音注だと考えていたことがわかる。

4 黃坤堯・鄧仕樑1988の校勘でも「桃始，式志反」を補う。

東風解凍，蟄蟲始振，魚上冰，獺祭魚，鴻鴈來。…

是月也，不可以稱兵，稱兵必天殃，兵戎不起，不可從我始，…。

始雨水，桃始華，倉庚鳴，鷹化為鳩。…

是月也，日夜分，雷乃發聲，始電，蟄蟲咸動，啓戶始出。…

桐始華，田鼠化為鴽，虹始見，萍始生。…

是月也，…天子始乘舟。…

是月也，…母起土功，毋發大始絺，…。

小暑至，螳螂生，鵙始鳴，反舌無聲。…

鹿角解，蟬始鳴，半夏生，木董榮。…

季夏之月，日在柳，…溫風始至，…。

涼風至，白露降，寒蟬鳴，鷹乃祭鳥，用始行戮。…

是月也，以立秋，…天地始肅，…天子…命百官始收斂。…

是月也，日夜分，雷始收聲，蟄蟲壞戶，…陽氣日衰，水始涸，…是月也，霜始降，則百工休。…

水始冰，地始凍。…

是月也，天子始裘。…

冰益壯，地始坼，鶡旦不鳴，虎始交…

芸始生，荔挺出，蚯蚓結，麋角解，水泉動。…

鴈北鄉，鵲始巢，雉雊，鷄乳。…

是月也，命漁師始漁。…

乃命四監，…歲且更始，專而農民，毋有所使。…

「始」が「蟬始鳴」と同じ機能を持つように思われる「蟄蟲始振」以下，他の「始」には反切はない。段玉裁も「其亦庸人自擾也矣」⁵ というように，これは「蟬始鳴」の「始」に音があるのがおかしいと考えざるを得ない。「始」が常用字である⁶ こと考えても，「始」が多読字であるのに反切が『釋文』に一見のみというのは不自然である。また，「市志反」が「始」の反切と受け取られたのは，反切下字の「志」（志韻）が「始」本来の音「詩止切」（『廣韻』、『集韻』は「首止切」）の「止」（止韻）の去聲にあたるからだと思われるが，反切上字の方は，「始」本来の音の聲母と異なる。一般に，多読字は聲調のみが異なることが多いため，これも問題だと考える人も多かったようで，『集韻』でも，『釋文』の「市志反」に基づいて「始」を

5 『説文解字注』十二下「始」字注。

6 因みに，十三經の經文に「始」は，348段に見える。（中央研究院漢籍電子文獻により調査）

志韻に載せながら、反切は「式吏切」に改める。また、毛晃⁷・毛居正⁸父子のほか、呉承仕⁹、黄焯¹⁰など、反切上字の方を改めるべきだとする意見は以後も繰り返し現れる。「市志反」を「始」の反切と考えるといろいろ不都合が生じるのである。

それでは、既に法偉堂が指摘している¹⁰ように「蟬始，市志反」が「蟬」の反切だとすればどうだろうか。「蟬」には『釋文』では、この例のほか、二箇所反切がある。

『毛詩』大雅・蕩「如蝟」毛傳「蝟，蟬也」釋文「蟬，市延反，字林云，蝟蝟」

『爾雅』釋蟲「蝟」郭注「如蟬而小」釋文「蟬，示延反，字林云，蝟蝟也」

「始」と異なり物名の「蟬」には多音字でなくても音注がつくことはありうるし、「市志反」の反切上字は「蟬」の聲母にあう。反切下字の方が誤りだとすれば、なぜ「志」に誤ったのか。「市志反」という反切は、『釋文』では38見える。

卷二・易・頤「虎視，徐市志反，又市止反」

卷三・書・五子之歌「嗜，市志反」

卷四・書・泰誓上「嗜，市志反，切韻常利反」

卷四・書・酒誥「嗜，市志反」

卷五・詩・伯兮「心嗜，市志反」

卷六・詩・楚茨「神耆，市志反，徐云又巨之反，下章同」

卷七・詩・抑「耆酒，市志反」

卷七・詩商頌・那祀「所耆，市志反」

卷九・周礼・伊耆氏「耆慾，市志反，下音欲，本多作欲」

卷十・儀礼・士喪禮「耆酒，市志反」

卷十一・礼記・曲礼上「視必，常止反，下同，徐音示，沈又市志反」

卷十一・礼記・曲礼上「淫視，如字，徐市志反」

卷十一・礼記・檀弓「不嗜，市志反」

卷十一・礼記・檀弓「之嗜，市志反，貪也，注同」

卷十一・礼記・王制「耆欲，市志反」

卷十一・礼記・月令「嗜欲，市志反」

卷十一・礼記・月令「蟬始，市志反」

卷十一・礼記・月令「貪耆，市志反」

7 『増修五註禮部韻略』。

8 『六經正誤』卷四に「蟬始，市志反，當作申志反，申字訛作市，桃始華、桐始華、水始涸、霜始降、水始冰、地始凍、芸始生、鵲始巢，義與此同，皆當音試」。

9 卷二禮記音義。

10 邵榮芬『經典釋文音系』第七章同音反切字表・山攝仙韻系三等開口・常母「蟬市延」注(111)引く法偉堂説。

- 卷十一・礼記・月令「蟬始，市志反」
卷十二・礼記・郊特牲「可耆，市志反」
卷十二・礼記・内則「視，如字，徐市志反」
卷十二・礼記・内則「不耆，市志反」
卷十二・礼記・内則「耆，市志反」
卷十二・礼記・玉藻「視容，如字，徐市志反」
卷十三・礼記・雜記下「視不，如字，徐市志反」
卷十三・礼記・祭義「所耆，市志反，注及下並同」
卷十三・礼記・祭統「耆欲，市志反」
卷十三・礼記・祭統「耆欲，市志反」
卷十三・礼記・孔子閒居「耆欲，市志反，注同」
卷十七・左傳・宣公十五年傳「耆酒，市志反」
卷十八・左傳・襄公二十八年經「耆酒，市志反」
卷十八・左傳・襄公二十八年傳「耆酒，市志反」
卷十八・左傳・襄公三十年經「耆酒，市志反」
卷十八・左傳・襄公三十年傳「耆酒，市志反」
卷二十一・公羊傳・桓公二年「所嗜，市志反」
卷二十一・襄公二十九年「僚耆，市志反」
卷二十六・莊子・齊物論「耆，市志反，字或作嗜，崔本作廿」
卷二十六・莊子・大宗師「其耆，市志反」

以上のように、「蟬始，市志反」一例を除くと、「視」，「嗜」，「嗜」に通ずる「耆」のみだが、このように「市志反」を並べてみて気がつくのは、通志堂本『釋文』などでは「蟬始，市志反」の三項目上に「嗜欲，市志反」が見えることである。「蟬始，市志反」は、三項目上と同じ反切上字に惑わされ、下字を書き写し間違った結果ではないだろうか。

つまり、『礼記』月令『釋文』の「蟬始」の下の反切はもともと「蟬」の音注だったが、三項目前の反切に引かれて、反切下字を本来上聲の「始」の去聲にあたる「志」に誤ってしまったために、賈昌朝も「始」の反切だと誤解し、『羣經音辨』において「始」が多音字とされて、以後、いらざる混乱を招いたのだと思われるのである。管見の限り、『羣經音辨』以前には、「始」の去聲音の存在を示す資料はない。

三 『羣經音辨』以後

韻書で最初に「始」を去聲に載せているのは『集韻』であり、その義注には「始也，禮蟬始

鳴」とある。『羣經音辨』を著わした賈昌朝が『集韻』編纂者の一人であることはよく知られているが、張渭毅1998の考証によれば、『羣經音辨』は『集韻』より早く成立していたらしく、『羣經音辨』が『集韻』に少なからぬ影響を与えたであろうことは想像に難くない。『集韻』に見える「始」の去聲音は『羣經音辨』の『釋文』誤解釋を承けたものとみて、間違いなだらう。ただ、反切上字は既に述べたごとく、改めている。『集韻』に載せられたことにより、以後の韻書には、『集韻』を承けて「始」の去聲音を載せるものがある。例えば、『禮部韻略』では上聲にしか「始」を載せないが、『増修互註禮部韻略』（以下、『増韻』）では、去聲にも見え、「始，方始為之，月令桃始華，蟬始鳴，音式志反，又止韻（増入）」（卷四・六至）という義釋がついている。以下、上聲に加えて去聲に「始」を載せる韻書のうち主なものの、去聲の「始」の項を挙げる。

『五音集韻』卷十・去五至「始，始也，禮蟬始鳴」

『古今韻會舉要』卷十七・去四「始，方始為之也，禮記月令，桃始華，蟬始鳴，音式志切，又紙韻○毛氏韻増」

『韻府群玉』卷十三・四寘「始，方也，月令桃一華，蟬一鳴。」

『洪武正韻』卷十・二寘「始，方始為之月令桃始華蟬始鳴音式志反又紙韻」

『韻略易通』卷下・十一支辭（韻）・上（聲）去聲「始，花初開也」

『音韻闡微』卷七・四寘・審三「始，韻會方始為之也」

『詩詞通韻』（清康熙刊本）卷四・寘一・試「始」。

『叶韻彙輯』卷三十四・四寘「始，集韻式吏切，始也，禮記蟬始鳴」

『音韻述微』卷十七・四寘・試（式異切）小韻「始，從此始也，與紙韻義異」

『佩文韻府』卷六十三・四寘「始，集韻式吏切，始也，禮記蟬始鳴，（韻藻増）從此始，（杜甫詩）若耶溪雲門者吾獨胡爲在泥滓青鞵布韞——」

以上のように、『集韻』以後の韻書には、「始」の去聲音の記載を承けるものが珍しくなく、義釋についても、概ね『集韻』『増韻』のものを継承しているようである。また、韻書ばかりでなく、字書にも、「始」に上聲音だけでなく去聲音を載せるものや去聲音に言及するものがある。まず、『集韻』と「相い副いて施行」（四庫全書提要）された『類篇』卷三十五女部に「首止切，説文女之初也，……，又式吏切，始也，禮蟬始鳴」とある。また、戴侗の『六書故』卷九「始」の項の注には、「月令蟬始鳴，陸氏市志切，集韻式吏切，按今俗音，猶有式吏之音者」と、「俗音」とはしているが、去聲音を否定しない。『字彙』丑集・女部にも「始，詩止切，音矢，初也，又姓○又去聲，式至切，〔易婦妹象〕人之終始也，叶天地之大義○毛晃曰，本初之始則上聲，易資治大始之類是也，方始為之始則去聲，禮記桃始華，蟬始鳴之類是也」と見え、『易』の例を引く。これは、おそらく、「義」が去聲であるためだと思われるが、『正字通』丑集下・女部では、「始，師止切，……，旧註引毛晃曰，本初之始則上聲，易資治大始之類是也，

方始為之始則去聲，禮記桃始華，蟬始鳴之類是也，按毛說迂泥甚，戴侗（六書故）曰，月令蟬始鳴，陸氏市志切，集韻式吏切，今俗音猶有式吏之音，拋戴說旧註又去聲式至切，引易婦妹象人之終始叶天地之大義，蓋以俗音為正音，誤也，又古音餘真韻有始，引林閩翁孺曰，始試也，月令桃始華，地始凍皆音試，宋人詞褪粉梅梢始花桃樹，按始叶音或轉真韻，月令数始字当如本音，……」と，「旧註」すなわち『字彙』を非難し、『禮記』月令の「始」ももとの上聲音で読むべきだとしているが，「俗音」としての「始」の去聲の存在は意識しており，宋词で「始」が去聲音に読まれることがあるのも否定しない。なお、『古音餘』は明の楊慎の撰，『古音餘』は「始」を「試」に作る。また，「宋人詞」として引かれている「褪粉梅梢始花桃樹」は周邦彦の「瑞龍吟」だが，今本『片玉詞』でも「始」は「試」に作る。時代が下がって，清の『康熙字典』巻六女部も「又式吏切，音試，毛晃曰，本始之始上聲，易資始大始之類是也，方始為之始去聲，禮月令桃始華，蟬始鳴之類，是也」と，去聲の反切を載せ、『増韻』の義注を引く。

『正字通』の引用文に宋词が見えるように，詩詞の韻律に関しても，「始」の去聲音は問題になる。すぐに気のつく範囲だけでも，以下のように，すでに，宋の時代にいくつか，唐詩の口調のよくない箇所を「始」を去聲に読んで解決しようとする議論がある。

王觀國『學林』卷九・始「李希聲詩話曰，皂鷗寒始急¹¹，千呼萬喚始出來¹²，人皆以為語病，然始有二音，有所宿留而今甫然者當從去聲，二詩自非語病，觀國嘗考其故矣，始終之始則音上聲，有所宿留而今甫然者則音去聲，所謂有太始，所謂萬物資始，所謂始畫八卦，所謂有始有卒，此皆終始之始也，杜子美安西兵詩曰，臨危經久戰，用意始知神，韓退之月臺詩¹³曰，直須臺上看，始奈月明何，此皆有所宿留而今甫然者也，如禮記月令蟬始鳴，陸德明音義始作試，則李希聲之說不妄矣」

孫奕『示兒編』卷二十三・字說・集字三「竊怪，杜詩有皂鷗寒始急，白樂天詩有千呼萬喚始出來，二者似涉語病，司馬溫公云，始字皆作去聲讀，若從上聲尤可恠笑，故李希聲云，始有二音終始之始則音上聲，萬物資始是也，有所宿留而今甫然者則音去聲，蟬始鳴是也，寒始急始出來，亦蟬始鳴之類乎（同上¹⁴）」

これらの記載からは，俗音としての「始」の去聲音の存在を認識する人が宋の頃にはすでに多かったことが伺える。『學林』、『示兒編』に引かれる「李希聲詩話」と同じ内容は，劉攽『中山詩話』にも見え，金の王若虛『滹南集』や閻若璩『潛邱劄記』にも「近代詩話」「劉攽中山詩話」などとして引かれている。詩の音注では，詩話に引かれていた杜甫の贈陳二補闕「皂

11 杜甫「贈陳二補闕」

12 白居易の「琵琶行」

13 「和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」の一。

14 『藝苑雌黃』の引用。

「鵬寒始急」について『集千家註杜工部詩集』卷二の注に宋の蔡夢弼の説として「始音試」が引かれている。また、清の仇兆鼈『杜詩詳註』では、『佩文韻府』去聲の「始」項に見える奉先劉少府新畫山水障歌「青鞋布襪從此始」には音注がないが、以下の13箇所去聲の音がつけられている。

- 卷二・同諸公登慈恩寺塔「仰穿龍蛇窟，始（音試）出枝撐幽」
- 卷三・贈陳二補闕「皂鵬寒始（音試）急」
- 卷五・留別賈嚴二閣老兩院補闕「一秋常苦雨，今日始（去聲）無雲」
- 卷六・觀安西兵過赴過中待命二首之一「臨危經久戰，用急始（去聲，一作使）如神」
- 卷九・鹿頭山「遊子出京華，劍門不可越，及茲險阻盡，始（去聲）喜原野濶」
- 卷十・杜鵑行「爾豈摧殘始（去聲，晉作如）發憤，羞帶羽翎傷形愚」
- 卷十・戲作花卿歌「成都猛將有花卿，學語小兒知姓名，用如快鶻風火生，見賊惟多身始（去聲）輕」
- 卷十一・野望「金華山北涪水西，仲冬風日始（去聲）淒淒」
- 卷十二・惠義寺園送辛員外 又送「同舟昨日何由得，並馬今朝未擬迴，直到綿州始（去聲）分首，江邊樹裏共誰來」
- 卷十八・喜觀即到復題短篇二首之二「應論十年事，愁絕始（去聲）惺惺」
- 卷十九・又上後園山脚上聲「秋風亦已起，江漢始（去聲）如湯」
- 卷二十・向夕「琴書散明燭，長夜始（去聲）堪終」
- 卷二十一・江邊星月二首「客愁殊未已，他夕始（去聲）相鮮」

また、詩の音注のほかにも、『易』繫辭下「于是始作八卦」の「始」について、宋馮椅『厚齋易學』に「始去聲」（卷四十五 易外傳第十三）という音注が見える。

四 おわりに

以上、「始」の去聲音が『羣經音辨』が『經典釋文』の反切を誤って解釋したことから起こったことと、その後、その誤りが繼承され、詩の鑑賞などにまで、影響を及ぼしたことを述べた。すべての始まりは、『羣經音辨』だったのである。既に、森賀一恵2000で觸れたように『羣經音辨』、特に第六卷は、それ以後の多音字解釋の方向を決定づけるようなものだった。『羣經音辨』が『集韻』の反切改變に与えた影響などは、張渭毅1998でも取り扱われているが、後世により大きな影響を与えたのは、多音字を語彙の意味でなく文法的意味の違いと解釋する傾向のある第六卷の多音字解釋だったのでないだろうか。『程氏家塾讀書分年日程』⁵ や『經史動靜

15 宮紀子氏のご教示による。宮紀子2003, p.15参照

字音』などが、第六巻のみを抜き出しているという事実は、単なる偶然ではなく、意味があったのだと私には思われるのである。

参考文献

- 黄坤堯・鄧仕樑1988, 『新校索引經典釋文』(學海出版社)
- 黄焯1980, 『經典釋文彙校』(中華書局)
- 吳承仕1923, 『經籍舊音辨證』(1986年北京中華書局本による)
- 孫玉文2000, 『漢語變調構詞研究』(北京大學出版社)
- 張渭毅1998, 「賈昌朝『羣經音辨』改良反切的嘗試及其對『集韻』的影響——『羣經音辨』研究之一」, 『語苑插英(慶祝唐作藩教授七十壽辰學術論文集)』(北京大學出版社) pp.77-93
- 宮紀子2003, 「『對策』の對策——大元ウルス治下における科擧と出版」, 『古典學の現在V』(文部科學省科學研究費補助金特定領域研究「古典學の再構築」総括班発行)
- 森賀一惠2000, 「四聲別義と『羣經音辨』」, 『興膳教授退官記念中國文學論集』(汲古書院) pp.501-514